

2023年度金沢大学大学院人間社会環境研究科(博士前期課程)
第2期募集 入学試験問題

(1枚のうち 1枚目)

専攻名	経済学	選抜区分	外国人
試験科目	経済史		

次の問題に解答しなさい。なお、1つの問題につき1枚の解答用紙を使用すること。解答用紙には選択した問題番号を明記すること。

問題1：経済学を専門とする学士課程の学生に講義するものと仮定し、下記注意事項にしたがって、日本経済史・中国経済史・経済史のうちいずれか1科目について、15回分の講義計画を立案しなさい。

【注意事項】

- 冒頭にて、科目名を明記すること。
- 1～15回それぞれについて、講義内容が明確になるような講義タイトルを列挙すること。
- ガイダンスおよび試験は除くこと。
- テーマ別ではなく、編年体とすること。
- 授業範囲について、始期は自由とするが、終期は現在(21世紀)とすること。

問題2：問題1で示した講義のうち、いずれか1回分の講義概要を1,000字程度で述べなさい。

2023 年度 2 期金沢大学大学院人間社会環境研究科（博士前期課程）

学力検査問題解答例・出題意図

専攻名 経済学専攻 選抜区分 外国人

科目名 経済史 記載者氏名 小林信介

解答例又は出題意図

【別紙の添付又はデータによる提出の場合は、その旨を記載願います。】

問題 1

受験者が志望している領域（経済史・中国経済史・日本経済史）について、その史的展開の全体像を把握しているのかを問うことが、出題意図である。

問題 2

特定の時代における経済的事象について、因果関係を踏まえ理解しているのかを問うことが、出題意図である。

2023年度金沢大学大学院人間社会環境研究科(博士前期課程)

第2期募集 入学試験問題

(1枚のうち 1枚目)

専攻名	経済学専攻	選抜区分	一般・外国人・社会人
試験科目	経営学		

次の問題から 2問を選択して解答しなさい。なお、1つの問題につき1枚の解答用紙を使用すること。解答用紙には選択した問題番号を明記すること。

問題1 以下の(1)および(2)の問題について解答しなさい。

- (1) 企業の選択する組織構造は、大きく事業部制組織と職能別部門組織に分けられる。事業部制組織と職能別部門組織の特徴について、両者の違いを押さえながら説明しなさい。
- (2) 企業が多角化戦略をとる場合、職能別部門組織よりも事業部制組織の方が適合的であるとされる。その理由について、「組織は戦略に従う」という命題を用いて説明しなさい。

問題2 以下の(1)および(2)の問題について解答しなさい。

- (1) 1960年代から1980年代にかけて日本の大企業では米国企業と比べて合併・買収の現象が余り進行しなかったのは何故だろうか。その理由を述べなさい。
- (2) 合併・買収の現象が余り見られないことのメリットとデメリットについて、あなたの考えを述べなさい。

2023 年度 2 期金沢大学大学院人間社会環境研究科（博士前期課程）

学力検査問題解答例・出題意図

専攻名 経済学専攻 選抜区分 一般 ・ 外国人 ・ 社会人

科目名 経営学 記載者氏名 鈴木智気・齋藤毅

解答例又は出題意図

【出題意図】

次の課題テキストの内容に関連した出題となっている。

高橋伸夫『経営の再生——戦略の時代・組織の時代—— [第4版]』有斐閣、2016年。

問題1は、経営学の基本領域である経営組織論と経営戦略論からの出題である。(1)は、経営組織論における組織構造についての基礎的知識を、代表的な組織構造である事業部制組織と機能別部門組織に対する説明によって試す問題である。(2)は、組織構造に対する基礎的知識を踏まえ、組織構造と経営戦略の関係についての基礎的理解を問う問題になっている。

問題2は、企業の「所有」に関する基礎知識の有無と基礎的分析能力を問う問題である。(1)は、合併や買収にかかわる基本概念の理解力を問う問題である。(2)は、基礎知識に基づいて「所有」のあり方を複眼的に考察することができるかを問う問題である。

2023年度金沢大学大学院人間社会環境研究科(博士前期課程)

第2期募集 入学試験問題

(1枚のうち1枚目)

専攻名	経済学	選抜区分	一般・外国人・社会人
試験科目	経済理論		

次の問題から 2問を選択して解答しなさい。なお、1つの問題につき1枚の解答用紙を使用すること。解答用紙には選択した問題番号を明記すること。

設問1、企業1と企業2による複占市場を考える。この市場の逆需要関数は、価格を p とし、需要量を D とすると、 $p = a - D$ で与えられる。また、企業1と企業2の費用関数は、それぞれ $C_1(y_1) = cy_1$ と $C_2(y_2) = cy_2$ で与えられるとする。ただし、 y_1 と y_2 はそれぞれ企業1と企業2の生産量とし、 $0 < c < a$ を満たすとする。このとき、以下の問いに答えよ。

- (1) この市場のクールノー均衡における企業1と企業2の生産量と利潤、及び価格を求めよ。
- (2) 企業1と企業2がカルテルを組み、二つの企業の利潤の和を最大とするように、企業1と企業2が生産量を選んだとする。ただし、得られた利潤は企業1と企業2の間で、半分ずつ分けるとする。このとき、それぞれの企業の利潤はクールノー均衡と比較して大きいか。ただし理由も述べること。
- (3) 企業1を先導者、企業2を追従者とするとき、この市場のシュタッケルベルグ均衡における企業1と企業2の生産量と利潤、及び価格を求めよ。

設問2、以下の問いに答えなさい

- (1) 金利平価説(利子裁定)、購買力平価説とはそれぞれどのような考え方であるか説明しなさい。
- (2) 2022年には記録的なペースで円安ドル高が進行した。その理由を理論的に説明しなさい。
- (3) 自国通貨の減価が経常収支に与える短期的影響と長期的影響をそれぞれ説明しなさい。
- (4) 変動為替制度、資本移動が自由な下でのマンデル・フレミングモデル(開放経済のISLMモデル)を考える。ただし自国・相手国はともに大国だと仮定する。このとき相手国が金融引き締めを実施した際、自国の国民所得、為替レート、自国の実質利子率にはどのような影響があるか、モデルに則して理論的に説明しなさい。

2023 年度 2 期金沢大学大学院人間社会環境研究科（博士前期課程）

学力検査問題解答例・出題意図

専攻名 経済学 選抜区分 一般・外国人・社会人

科目名 経済理論 記載者氏名 _____

解答例又は出題意図

経済理論の入学試験では、事前に指定された 2 冊のテキスト（『入門ミクロ経済学（第 3 版）』（井堀利宏、新世社、2019 年）、『入門マクロ経済学（第 4 版）』（井堀利宏、新世社、2020 年））で取り扱われた範囲に絞って出題している。

経済理論を学習するにあたって、大学院で要求されるレベルと、学部で要求されるレベルとでは、大きなギャップが存在すると言われている。そのため学部レベルの経済学と数学を十二分に理解していることは、大学院で経済理論を学ぶために最低限必要な条件だと言える。よって出題者は、以下の 3 つの能力が受験生に備わっているかを確認することを意図して本試験を作成し、採点する。

①テキストの内容を適切に理解できる力があるか。②テキストの内容を踏まえて、現実の経済現象について自分の言葉で論じる力があるか。③大学院で経済学を学ぶために最低限必要な数学的知識を身に付けているか。